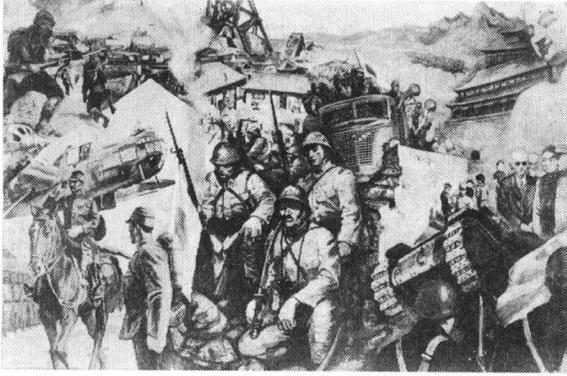


⑯ 油画科卒業生の共同制作

昭和十一年三月油画科を卒業した城信義は日中戦争勃発に際して出征。翌十二年十一月四日、激戦の続く中、命令を伝えてクリークを這って最前線に戻り、「城、帰りました」と、立ち上がって敬礼した瞬間に鉄兜の真ん中に敵弾を受け、死去した。級友たちはこれを悼んで記念の共同制作に取り組んだ。その一人、永田精二氏によれば、五百号の大作で、日産



城信義追悼共同制作（永田精二氏提供絵はがきより）

自動車材料費を援助し、先ず木綿を継合わせてカンバスを作り、油彩で中央に城信義、周囲に乗馬姿の陸軍大将、紫禁城、戦車などを配置したモニタージュ画を完成。靖国神社の傍にあった国防館に献納した。制作には二十数人が参加したが、北進軍から一人だけ城が戦死した所へ招くという話があったので、永田氏が赴き、戦地の様子を見、級友の戦死の状況を聞き取って帰ったという。作品は戦災で失われた。

⑰ 寺崎広業銅像建立と奨学金寄附

昭和十二年二月二十一日、明治、大正の日本画壇に盛名を馳せた

元本校教授寺崎広業の銅像（胸像）除幕式が校庭で行われ、翌日建設者総代寺崎広載より本校への贈呈がなされた。建立のいきさつについて昭和十年三月十日の『都新聞』は次のように伝えている。

〔上略〕寺崎廣業畫伯逝いて十七年、その法要は去月廿一日志村の總泉寺で營まれたが、當日會合した舊天籟畫塾の人々、即ち野田九浦、鳥谷幡山、矢澤弦月、水上泰生、吉田秋光、菊澤武江、岡部光邦、その他の門下生と川合玉堂、結城素明、松岡映丘氏等東京美術學校教授等が發起となり、信州上林の廣業寺以外、東京にも故畫伯の功績を記念すべき計畫を樹てやうとの議が起り結局、東京美術學校構内に故畫伯の銅像を建立することになり實行委員を擧げ、趣意書は近く正木帝國美術院長が執筆して沿く各方面に配布して援助を請ひ基金を募集することとなつた、銅像の製作は畫伯在世の折、金婚式祝賀に畫伯夫妻の木像を製作した縁故により帝國美術院會員内藤伸氏が當ることとなつた。なほ此の金婚式記念の木像はいま信州上林の廣業寺の本尊となつてゐると

この銅像は右の記事にもあるとおり、原型制作を内藤伸が担当、鑄造は山内春造が担当し、昭和十一年二月着手し、同十二年二月に完成。記録に総経費二千五百円とある。

除幕式の当日は發起人惣代として正木直彦が一場の回顧談をなし、また、追つて五月に至り銅像建設会代表者野田九浦より本校へ日本画科生徒の技術奨励費ならびに右銅像維持費としての「寺崎奨学金寄附金」千円が寄附された。